

議題 1 についての主な意見

（「空襲の記憶」に関する意見）

- ・長崎原爆資料館では感染予防対策として、触れることができる展示にはカバーをしたり、タッチパネルは触れさせないようにしたりという対策を講じている。
- ・タッチパネルの画面も触れさせない時間はスライドショーによる展示ができるようにしておくなど、アフターコロナの資料館としての準備が必要ではないか。
- ・風船爆弾の仕組みや製造方法に関する展示では、当時、女子挺身隊の方が風船爆弾の製造に係っていた。その記録等が大事だ。

（「運命の昭和20年8月8日・9日」に関する意見）

- ・シアター展示がすごく印象には残るが、ここでは、8月8日に八幡大空襲があって、9日にB29が来て、旋回して長崎に行ったぐらいしか紹介していないので、小倉に資料館を建設する必要があったという事が、ちょっと印象が弱いように感じた。
- ・戦争を体験した人は多くないため、事実をきちんと伝えることは非常に重要である。戦争体験者に検証してもらいながら展示の制作をしていただきたい。

（「戦後の復興」に関する意見）

- ・戦後復興を映像で見せるという事は非常に大事だと思うが、実物資料を見せることも大事なので、戦後に企業がつくってきた製品なども展示するのも良い。
- ・「運命の日8月8日・9日」の展示は、何も知らずに来た人たちにとっては、重たい映像を見ることになる事になるため、「戦後の復興」の展示がより大事になる。
- ・戦争が終わって、先人が、がんばって今日の北九州市を構築した。本当に苦しい中で、製造業の企業のがんばりで、働くところがたくさんあったという事を展示して欲しい。

（「エピローグ」に関する意見）

- ・SDGsについては、戦後復興の原点であった、ものづくりが公害で停滞し、その後、復活するという形で、SDGsの展示をしないとシビックプライドに結び付きにくい。
- ・戦争の悲惨さとか怖さとか、戦争はしてはいけないとか、戦後の復興は資料館を見て、体験していけば分かるが、資料館の建設の原点である「なぜ小倉に？」というのがエピローグに、もっと表れていいのではないか。
- ・「エピローグ」では、最後に感想を書くところがあるが、それ以上に、展示を見た後に、一人ひとりのものとする沈黙考というような、ゆとりみたいなものも必要ではないか。

（「非核平和都市宣言」に関する意見）

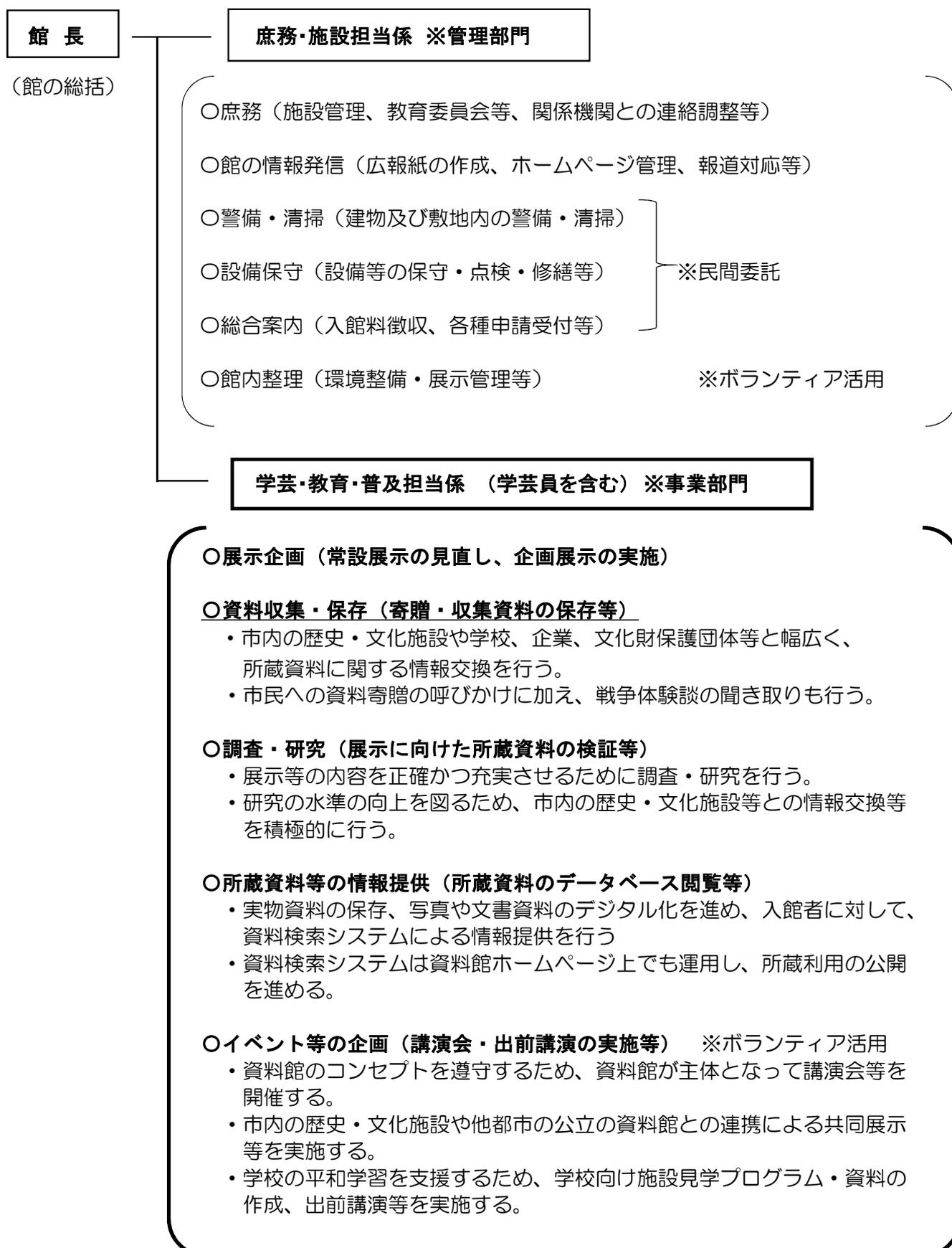
- ・非核平和都市宣言の紹介は、展示コーナーの中で、過去の戦争を経て、市として平和のメッセージがあるというストーリーが来館者には分かりやすいのではないか
- ・入口の付近に展示することは、ロビーの中などで入館者の目に触れる機会は多いとなるが、入館者の動線を考えると思いのほか足を止めにくいのではないか。
- ・宣言の内容は、展示の中から、それぞれに感じ取ることがいちばん重要ではないか。目に留まるのか留まらないとか、どこに展示するのかという事は重要なことではなく、展示室を最後まで歩いて「こういうことなんだ」と思うことがいちばん大切な事では。

議題 2 : (仮称) 平和資料館の管理・運営について

- ・ 管理・運勢体制について
- ・ 戦時資料の収集について

(仮称) 平和資料館の管理・運営について (案)

1 管理・運営体制



戦時資料の収集について

1 戦時資料の収集

(仮称) 平和資料館は「市民の戦争体験や当時の暮らしを物語る資料などを保存・継承していく」ことをコンセプトにしている。

そのため、市民に対して資料の寄贈の呼びかけや学校や企業博物館、図書館等に照会を行う等、戦時資料の収集を進めている。

また、市民から募集した戦争体験談から印象的な証言をピックアップした展示を予定している。

2 具体的な資料収集の事例

資料例	収集方法	展示（保存・記録）方法
■実物資料 <ul style="list-style-type: none"> 日常生活用品（配給切符、紙幣、国民服等） 教育・子ども用品（玩具、学用品等） 軍装品（軍服、軍隊手帳等） 軍隊生活用品（水筒、慰問袋、寄せ書き等） 代用品（陶製、紙製、竹製等）等 	公 募	<ul style="list-style-type: none"> 実物展示 画像検索システムで閲覧（画像データ化） アーカイブコーナーで映像視聴（映像データ化）
■写真資料・映像資料・音声資料 <ul style="list-style-type: none"> 戦中、戦後のまちの風景写真 戦争中のニュース映画、記録映像 等 	公 募 調 査	
■図書資料・文献資料 <ul style="list-style-type: none"> 戦時中の新聞、ポスター、雑誌 国、地方公共団体が出版した図書、公文書 国内外の類似施設が保管している資料 	調 査	
■市民の戦争体験談（冊子・インタビュー映像）	公 募	

【参考：資料収集の呼びかけ】※市役所ホームページより

戦災遺品、写真等をはじめ、戦時下（戦前・戦中・戦後直後の動乱期）における芸道の市民生活を知ることができる戦争関連の資料を募集しています。

【収集対象】

- 八幡大空襲をはじめとする本市の空襲に関する資料
- 小倉造兵廠に関する資料
- 戦後の復興が分かる資料
- 戦時下の市民の暮らしが分かる資料

3 戦時資料収集の視点

資料館が戦時資料の収集を進めていくため、以下の視点で意見を聴取する。

（視点）

- 戦時資料収集に向けた、市民への働きかけ及び関係機関との連携の進め方
- 資料収集のためのルールづくり
- 戦争体験談の収集・保存、来館者へ効果的な伝え方

議題 2 についての主な意見

（「戦時資料の収集」に関する意見）

- 寄贈者の気持ちはあるが、資料の寄贈は全て受け取ることはできない。収蔵庫にも限りがある。仮に受け取ったとしてもコンセプトに基づかないものは展示できないことを伝える必要がある。
- 資料を収集する際は、その資料にまつわるエピソードや寄贈者の戦争体験。家族である場合は聞いていた話しなどを詳しく聞き取っておくことが重要。寄贈いただく際に、学芸員が詳しく聞き取りをしている。
- （自分が所属する施設では）いただけるものは全ていただくというスタンスでやっている。しかし、いただいた物を活用できない、表に出せないというのはダメだと思っている。引き受ける時に「光を当ててあげられる場があるかどうか」を第一に考える。難しいものでも、企画やテーマを作って展示する事もあるので、「活用できるかできないか」がいちばん大きな判断基準になる。
- 古いものをどう風に残すか。減る事はない。重要なのは劣化をしていくことである。アーカイブ化、映像に撮る等、3次元データとして保存する。新しいものづくりの、この市においての保存の仕方、データの残し方も必要になる。
- 平和をテーマにした記念館等とネットワークを結んで、資料収集のルール作りを行っていくことも必要である。

（「戦争体験談の収集」に関する意見）

- 戦争を体験された方が非常に少なくなるという中、本当に時間との闘いみたいなところがある部分は、早急にやり始めないといけない。生の声みたいな形の物を集めておく必要がある。
- 戦争体験の収集は、今後、戦後復興時の体験を集めることがメインになる。5年後、10年後に集めようとしても遅い。いまからやるべきだ。戦争を実際に経験し、戦時下の記憶がある人はほとんどいないが、体験を集めることは必要だ。